

遅すぎた自覚め抄

儀永 秀雄

戦争のあったころ

人にはそれぞれぬきさきならぬ体験がある。説明してもしきれぬ実感がある。それは当人とって人生の一つの節となることもあるのだ。その体験が人生の上に支配的な影をおとしているとき、われわれはそれを原体験と呼ぶ。

僕の場合、それは戦争であり、死に直面させられたことであつた。

昭和十八年十二月、学徒臨時徴集で、文科系の学生の大半は

駆り立てられた。「大君に召される」ことを栄光と受け止め、「醜(しこ)の御盾」として出陣することが日本男児の誇りである時代であつた。「死んで還れ」が合言葉であり、敗戦の兆しがようやく見えはじめたそのころ、出撃は死を意味していた。「身を鴻毛の軽きに置いて」いさぎよく戦つて死ぬことは「悠久の大義に生きる」ことで、決して「死」を意味することではないと言いつた。こうして死の美学をあえて否定する者は、非国民の名で糾弾される時代であつた。

「ああ、たつたまんまで死んでいくんだ」

灰色の青春は、なに一つ楽しい思いでもなく、閉ざされた未来の前に立ちつくしていぼくには、いしれぬ倦怠感だけがあつた。ぼくは生まれて初めて詩を書いた。

孤絶
雪の夜を
わたしの歌はどこえやら

生の美学

大学の軍事教練を拒否したのは入学当初のことである。運動場では退役将校の号令の下、銃剣で藁束を突き刺す、いわゆる刺突の訓練が行われていた。中学生のころから、あれを何回やらされてきたことだろう。ぼくは唯然とした。「大学よおまえもか」――ぼくはそのとき以来、教練の授業を放棄した。たといそのことによつて卒業証書が与えられぬとしても、ぼくは人殺しの練習を拒んだことを誇りに思つてもいい、と思ひながら。

雪の夜を
わたしの歌があつたとて

雪の夜を

楳火のあかく
立ちて崩るる…

そのぼくにも、一つだけ救があつた。出陣の決まつた十月、大学の壮行会で、文学部長はこう言つてくれた。

「きみたちは不幸にして学徒半ばで出征するが、きみたちのあとは、講師がおり、助教授がおり、教授がいて学問の灯はしっかりと護りつづけているから、後顧の憂いなく大学の門を後にしてほしい。しかし、きみたちは学徒半ばで出征するのだから、どんなことがあつても生きて還つてきてほしい」と。

ぼくは感動した。当時タブーである「生きて還れ」という言葉で励まされたことは、僕を勇気づけて充分だつた。

「よし、生きて還ろう。死んでたまるか」

きつていくこの行動の美学は、ぼくを捉えて離さなかつた。

「おのれを生かし、人を生かすためにこの世はあるのではないか」裏返せば「おのれを殺し、人を殺すためにこの世はあるのではない」ということである。

死を待つだけの戦場

軍隊では一平卒で通すことにした。幹部候補生の例外である。死ぬのはごめんであり、人殺しはなおさらお断りである。もし将校にでもなれば、いつどこで人殺しの命令を下すかもしれないか。

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

飢えの中で

雪の中に男が行き倒れていた。彼は歩く力も起き上がる力もなく雪に埋もれていた。通りかかった一人の旅人は、男の倒れているのを見て見ぬふりをして通り過ぎた。つぎに通りかかった男は、倒れた男の傍に寄つたが、隣の町まで彼の道づれをしたのでは自分の命も危うくなると思い、「しばらくの辛抱だ。隣の町に着いたらすぐ救助の人びとをよこすから」と言い残して立ち去つた。

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

舟艇をアメリカ軍の爆撃でやられてしまひ、生き残り組は、短い騎兵銃を持つたまま、もと関東軍の歩兵の師団に転属させられ連日にわたる鉄器の猛爆撃の下で、トカゲの鳴き声まで学んだ斬込隊のゲリラの特訓を受けたたりすることになり、食うや食わずの一年有半が続いた。

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

ぼくはやがて中隊から四十キロも離れた山中の兵器監視小舎に取り残され、労役だけは免れたものの、密林生活の中の自給自足生活で、ただ死んでいくだけの毎日を送つた。

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

人が死ぬ。つぎつぎにいと簡単なに死んでいく。機関部に魚雷を受けた輸送船はまたたくまに沈む。その渦に巻きこまれ、海の藻屑と消えた生命はどれだけおびただしい数にのぼつたらう。戦わなくても殺されるのだ。その島でも極度の重労働と栄養失調で戦友はばたばた倒れた。たつきと泣き声が夜つびいて続いた。や

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

た友は、ものの三十メートルもいかぬうちに適戦機銃の銃弾であえない最期を遂げた。密林の中でゲリラに毒矢で殺された斥候兵。点火していないと思つて湿つた導火索に息を吹きかけたたんだイナイナイトが爆発して木っ葉になつた下士官。飲まず食わずのところへ食糧が届き、流動

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

人を焼く

山の向こうの谷に野戦病院があり、マラリアで病死した戦友の遺骸を受領に来るようにと連絡を受けた。大男だつた戦友は、痩せ細つて死ん

食糧がない。だから植物から虫にいたるまで手あたりしだいに採つては食べ、下痢をすれば止すのである。ようかんに似ていることから黄色火薬まで食べた。激しい腹痛を起こしたことはいうまでもない。餓鬼の世である。

つながる生き方をしているかと思つた。

高校時代の友人たちは、出征したまま消息を絶ち、敗戦後一年たつても音沙汰のないぼくを、つぎつぎと戦死したものと思ひ、寄り集まつてはぼくの死を無駄にすまいと誓ひ合つていてということであつた。ぼくは心から感動した。

復員後は年老いた引揚げの両親を養いながら、さらには妻子を抱えながら、激しく詩を人生を生きようとした。しかし厳しい現実の前に幾度か夢がみじんに砕かれたとき、きまつて還つてくるのは、死んだ戦友たちに対する後ろめたさであり、ぶざまな生き方しかできないおのれのさの拙さであつた。

しかしぼくは詩を、ドラマを、童話を、小説を書きまくつた。書いたものはすべて背後に捨てて、いつもただ出発だけが有り、戦いだけがあつた。

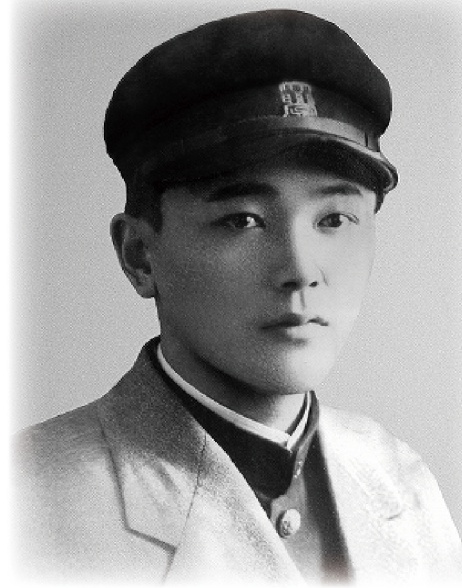
用意していた墓碑銘

南の孤島に生きていたころ、山の間から海を眺めては口ずさむ詩があつた。ぼくの生命を捧げるのは、はたして何に、そして誰に、という自問自答だつた。ぼくはひそかにそれを「絶唱」と呼び、ぼくの墓碑銘にと心組んでいた。

絶唱
海原の
うしおの果てに咲く花の
白きを
今日は
誰に捧げん

戦友の誰彼たちは死んでいった。ぼくは生き残つたからには、ぼくは彼らの分を含めて、凋まな白い花を、日々咲かしつづけていかねば済まぬ気がした。

僕は死んだ戦友に語りかけるかのように、おのれの生きざまを問いつづけ、生存のあかしを詩に刻み、まやかしには真つ向から対決せずにはおれなかつた。



東京帝国大学入学当時の儀永秀雄

彼の美しい魂が、愛と奉仕の果敢な行動を支えているのである。と、「聖書」の「よきサマリヤ人」に似た話であるが、無条件に人の生命を救い